

審査の結果の要旨

氏名 木内 俊彦

論文題目 カルロ・スカルパによる建築作品に見られる空間変移のデザインに関する研究

この論文は、イタリアの近現代建築の巨匠、カルロ・スカルパ（以下スカルパ）の建築作品において「空間変移」によるデザインが果たす役割を明らかにし、空間の経験に関わる建築固有の方法がもちうる可能性について新たな知見を得ようとするものである。

本論文は序ならびに四つの章で構成される。

序では研究の目的と意義、背景、ならびに既往研究と研究方法について説明している。スカルパは物の稠密な意匠と空間の経験を通し変容しつづけるような特質を備えた独特の作品群を生み出してきた。一方、既往のスカルパの作品研究は物と空間のあり方に注目しその経験的特質を理解するよう努めてきたものの、結果として両者を統合した経験の理解にまでには至っていないこと、また空間の質的な変化を含んだ継起的、蓄積的な経験をもたらすスカルパのデザインが建築一般のデザインを考える上で普遍性をもちうる重要な視点であることを示した上で、研究目的として、スカルパの作品では 1) 「物」と「空間」のデザインを統合するものとして「空間変移」がデザインされていること、2) 変移する「空間」には三つの原型があること、3) 「空間変移」には限られたパターンが存在すること、4) 作品群を通し「空間変移」に見られる全体性には一貫した特徴が存在することの四点を検証することが説明される。論文は大きく見ると、始めに「空間の三つの型」とそれらの間の「変移」のパターンの仮説が示され、次いで作品に即して「変移」の各パターンを検証、更にスカルパの三つの代表作を取り上げ、それぞれにおける経験が「空間変移」として編成されていること、「変移」の全体性に共通の特徴が見られることを論証、最後に結論として仮説検証の成否を論じ全体の総括を行うとされる。

第 1 章では、建築に関連した既往の空間論を概観した上で、詳細な実地調査を通しスカルパの作品における空間的特徴が〈包囲空間〉、〈周辺空間〉、〈開口空間〉の三つの空間図式に集約されるとの仮説が説明される。次いでそれらの空間図式が変移する様相をスカルパ以外の幾つか言説や実例を通し説明し、最後にスカルパの実作をひきながら「空間変移」のデザインパターン

の仮説として二つの大分類、移動タイプと並置タイプ、ならびにそれらの下位分類として合計 18 のパターンが存在することが示される。

第 2 章ではスカルパの 20 作品をとりあげ、移動タイプと並置タイプの変移パターンを対応する

作品に沿って説明している。移動タイプは視点移動によって生起するフレーミング（枠取り）による「変移」であり、「遮蔽、迂回、表裏非対称、交差面」の四フレーミングが移動後に意識されるタイプとして、「多面、ニッチ、複合、ソフトエッジ」の四フレーミングが移動中に意識される「立体フレーミング」として検証される。並置タイプは要素の並置によって生起する「変移」であり、「オブジェクト、フレーミング、オブジェクト-フレーミング、属性」の四つのパターンが存在することが示される。いずれも場面ごとの視覚像の変移を捉えた写真や透視図、アクソノメトリック、平面図等を元に作成した分析図によって論証を進めている。

第 3 章では、スカルパの三つの代表作の中から「変移」を観察するに適切な空間的なまとまりを選びとり、そこでの経験が「空間変移」の複合パターンとして記述できることを示し、またどの作品においてもパターンの組み合わせ、配列等に完結的で一義的な全体性がないことが共通の特徴になっていることが説明される。分析は前章と同様な手順で進められ、設定された経路に沿って展開する場面ごとに「空間変移」の様態が示される。カステルヴェッキオ美術館彫刻ギャラリーでは 23 箇所の場合で「変移」が存在し、建築の基本要素や開口、展示レイアウトのデザインを通し新旧関係が複雑に織り込まれ、新旧の理解とは別の空間的経験がもたらされていると指摘する。カノーヴァ美術館石膏像ギャラリーでは 7 場面計 31 の空間変移パターンが確認され、この限られた建物内部に人間の移動に応じ複雑多様な空間経験がもたらされているとし、ヴェネツィアビエンナーレ会場中庭では 6 場面で計 23 の空間変移が仕込まれ、小さい「一室空間とオブジェクト」といった単純な空間理解が連続的に変容する異質な場となってゆく様子が明らかにされる。最後にこれらの分析を通し、三作品に共通な特徴として「変移」がデザインの主題になっていること、そして場面や経路の異同にかかわらず完結的で一義的な全体性が捉えられない、開かれた「空間変移の連続体」が経験できるものと結論づけられる。

第 4 章では、以上の分析を踏まえ結論としてスカルパの作品理解のため「空間変移」の仮説が立証され、同時に四つの研究目的が達成されたとする。最後に「空間変移」という視点がもつ建築意匠論的な意義、他の建築作品や都市的な経験における「変移」について言及する。

以上のように、本論文は、スカルパの建築作品を「空間変移」という視点から捉え直し、これまで困難であったスカルパ作品の総合的な理解を空間的な経験にまで遡って可能にするとともに、その具体的な方法を解明することによって建築空間の経験を拡張するデザインの可能性を示し、建築の意匠分野の研究に大きな寄与を成したものと判断できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。